トビト書

1
1 **トビトの系図**(1)　トビト(2)の物語の書。かれの父はトビエル、その父はアナニエル、その父はアジュエル、その父はガバエル、その父はラファエル、その父はナフタリ族のアシエルの末ラグエルである。 2 トビトはアッシリア王シャルマネセル(3)*の時代に、上ガリラヤのケデシ・ナフタリの南、ハゾルから西へのぼる道の中途、セフェト*の北(4)に位するティスベ(5)から捕えられて移された者である。

3 わたしトビトは、一生の間、真理と正義の道をあゆみ、わたしといっしょにアッシリア人の地、ニネベに捕えられてきた兄弟たちや同胞に多くの施しをした。 4 そしてわたしがまだ年若くして故郷イスラエルの地にいたころ、わたしの先祖*ナフタリ族のものはみな、ダビデの家とエルサレムにそむき離れた。この都は全イスラエル族が全イスラエル族のために、いけにえをささげるため、選ばれたもので、そこには神の住まいとして神殿がささげられ、万代の

5 ために建てられていた。 6 わたしの兄弟たちや先祖ナフタリ族のものはみな、イスラエルの王ヤラベアムが、ガリラヤのすべての山の上と、ダンに建てた子牛に、いけにえをささげた。(6)

【注】(1) ヘブライ人は特にその系図を重んじていた。したがって聖書の歴史書の多くは系図をもって始まっている（サムエル上1 1-2、マタイ1 1-16参照）。

(2) ブルガタ訳では「トビア」。ギリシア語訳のシナイ写本とバチカン写本では「トビト」。これらはいずれも「善であるヤーウェ」または「わたしの善、ヤーウェである」を意味するヘブライ語の「トビヤ」または「トビヤフ」から転化したもの。

(3) アッシリア王シャルマネセル五世（727—722 B.C.）は、父王テグラテ・ピレセル三世（745—727 B.C.）の王位継承者。同王はサマリア征服を始め、次王サルゴンはこれを完成した（列下15 29 17 3-6参照）。ブルガタ訳では、アッシリア王「サルマナサル」となっているが、ギリシア語本では「エネメサル」。同一人であるか否かは、聖書学者間で問題となっている。

(4) 本節の「南、西、北」は、直訳では「右、後、左」となっている。これはヘブライ的表現で、かれらは朝日に向かって方角をきめたからである。

(5) 預言者エリヤの住んだギレアデのテシベ（列上17 1）とは異なる。現在のどこにあたるかは不明。ティスベは当時、一般に知られていなかったので、著書はよく知られていた地名、すなわちケデシ（ヨシュア12 22 19 37など）、ハゾル（ヨシュア11 10-13など）、セフェトをあげて、方角を示している。セフェトは今日の比較的大きな町ザフェドのことであろう。

(6) ヤラベアムの宗教的、政治的分離（列上12 16-30参照）は、礼拝の不一致をもたらした。イスラエルの多くの人々は、金で造った子牛を礼拝したり、丘の上のほこらやガリラヤの山々で礼拝（列上3 2-3参照）したりした。しかしトビトは忠実に律法に従い、エルサレムの神殿で礼拝した。

6 しかし全イスラエルに永遠のおきてとして書きしるされたとおり、わたしはしばしば
祭りの時、ただひとりエルサレムに行った。また初穂といごと、ならびに家畜の十分の
7 一と、初刈りの羊毛とを持って、急いでエルサレムに行き、祭壇のためにアロンの子
である司祭らに、これらを与えた。そしてエルサレムで仕えているレビの子らに、麦、
ぶどう酒、オリーブ油、ざくろの実、いちじく、その他の木の実の十分の一を与えた。
8 六年ごとに第二の十分の一を金に換え、毎年エルサレムに行き、それを使った。[7] また
第三の十分の一*を孤児や未亡人や、イスラエルの子らのうちに住む改宗者のために取っ
ておき、三年目ごとにかれらに与えた。そしてわたしたちはモーセの律法にしるされて
いるように、また父の母であり、アナニエルの妻であるデボラの戒めに従って――なぜ
ならわたしは父を失った孤児だったから――それを食した。
9 成年に達した時、わたしは父の親族のアンナ*という女と結婚し、彼女によって男の子
10 を得、トビア[8]と名づけた。そしてわたしは捕えられてアッシリアに行き、後にゆるさ
11 れて*、ニネベに来た。兄弟や親族たちはみな異邦人の食べ物を食べたが、[9] わたしは異
12 邦人の食べ物を食べなかった。わたしが熱心に神を心に思っていたので、13 いと高きお
ん者は、シャルマネセルの前で、わたしに恵みといつくしみとを与えてくださった。わ
14 たしの務めはかれに必要なすべての物を買うことであった。そのためにわたしはメデ

17—16 ィアに行き、そこで物を買っていたが、これはかれが死ぬまで続いた。ある日、わたし
15 はメディア地方のラゲス[10]*に住む親族ガブリの子*ガバエルに銀十タラント[11]入りの袋を預け
18 た。ところがシャルマネセルが死に、その子セナケリブがかれに代わって王位につく
におよんで、メディアへの道は危険となり、もはやわたしはメディアに行くことができ
16 なくなった。
シャルマネセルの時、わたしは家族の兄弟たちに多くの施しを
17 **トビトの善業** 19 し、飢えた者にはパンを与え、裸の人々には着物を着せた。同胞
20 のだれかが殺され、その死体がニネベの城壁の外に投げすてられて

---

(7) トビトは律法に従って初穂といごと十分の一のささげ物と羊の初毛とを、レビの子らに届けた。これらのささげ物は、「レビ記」の定めと少し異なる（レビ2 14 27 26 30 32参照）。これは各時代に定めが変わったことを示している。このような相違は、本書のおもなギリシア語本の間にも見られる。たとえば、ういごと動物の十分の一のささげ物はシナイ本にはあるが、バチカン本とアレキサンドリア本にはない。

(8) 「トビア」は「トビヤフ」の略。

(9) 異邦人の食べ物とは、汚れた動物の肉（レビ11 2-23参照）、または偶像に供えた物、しめ殺した動物の肉などのことである。

(10) ラゲスの町は、三つの形で知られている。すなわちギリシア古典の中では「ラガイ」、ユディト1 5では「ラガウ」、古代ペルシア語の形では「ラガ」。現在のテヘランから約十三キロの所にあるライの遺跡はこの町である。

(11) 当時の銀一タラントは、重こう（衡）で六十キロ、軽こう（衡）で三十キロであった。

18 いるのを見つけたなら、それを葬ったにちがいない。」またセナケリブ[12]が天の王にのろ
21 いのことばを吐いて罰せられ[13]、ユダヤから逃げ帰って来る時、もしかれに殺された者が
いたならば、わたしはその者を葬ったにちがいない。かれは怒りにまかせて多くのイス
ラエルの子らを殺したので、わたしはかれらの死体をひそかに隠して葬った。セナケリ
22 19 ブは、かれらの死体を捜したが、見つけることができなかった。」その時、あるひとり
のニネベ人が王のもとに行き、わたしがかれらをひそかに葬ったことを告げた。王がわ
たしのしたことを知り、わたしを殺そうと捜しているのがわかったので、わたしは恐ろ
23 20 しくなって逃げた。」こうしてわたしの財産はことごとく没収され、王室にすべて取り
上げられた。妻アンナとむすこトビアさえも*奪われて、何一つ残るものはなかった。
24 21 その後、四十日[14]もたたないうちに、王のふたりのむすこは、王を殺し、アララテの山
にのがれた[15]。そしてその子エサルハドンが、かれに次いで王位についた。かれはわたし
の兄弟アナエルの子アヒカル[16]に国家の全財政を任せ、すべての国務をつかさどらせた。
25 22 その後、アヒカルがわたしのために取りなしたので、わたしはニネベにもどった。なぜ
ならアヒカルはアッシリア王セナケリブの時、酒人がしら[17]であり、また王の印形の保管
者、王の家令、会計係であったからである。エサルハドンもかれを復職[18]させた。さてか
れはわたしのおいであり、また親せきであった。

2

1 **トビトの失明**　エサルハドン王の時代に、わたしは自分の家に帰り、妻アンナと
むすこトビアが、わたしにもどされた。わたしたちの五十日祭、す
なわち週の祭り[1]にあたり、わたしのために、よいごちそうが用意さ
2 れ、わたしは食卓についた。」料理が運ばれ、食べ物がたくさん並んでいたので、わた

(12) セナケリブは紀元前七〇五年から六八一年まで在位。サルゴンの子で、シャルマネセルとの血縁は明らかでない。
(13) セナケリブの神に対するのろいのことばと、かれに対する天罰については、列下18[13]—19[37]参照。
(14) ギリシア語のシナイ本では「四十日」、バチカン本では「五十日」、アレキサンドリア本では「四十五日」となっている。
(15) セナケリブの非業の死については列下19[37]参照。次の王はエサルハドン。アッシリア語でアッシュール・アワ・イッディン（680—669 B.C.）。サケルドノスは、エサルハドンのギリシア呼び。
(16) アヒカルは古代の東洋文学では、ギリシアのイソップ同様、有名な人物である。アヒカルはギリシア語のシナイ本では「アキカロス」、バチカン本では「アキアカロス」。かれの知恵と歴史的人物については解説25ページ以下参照。
(17) 「酒人がしら」はわが国の大ぜん（膳）職にあたる。
(18) ギリシア語では「エク・デウテラス」で、「王の次の位」と解釈する学者もいる。他の学者は、アヒカル物語にしるされているアヒカルがエサルハドン王の時代に職を失った後、再びエサルハドン王によって復職されたこと（解説26ページ参照）をさしていると解している。

【注】（1）「週」は複数形。バチカン写本によれば、「七週の祭り」。したがって「週の祭り」とはギリシア語の「ペンテコステ」（五十）と同意語で、過越祭の後五十日目に祝われる大祝日をさす（レビ23[15—21]、民28[26—31]、申16[9—12]参照）。

しはむすこトビアに向かい、「子よ、ニネベに捕えられてきた兄弟で、まごころから主
を思う貧しい者を、だれでもよいから捜し出して、連れてきなさい。そしてその人と食
事をともにしましょう。子よ、わたしはおまえの帰りを待っている」と言った。
3 そこでトビアは、わたしたちの兄弟のうちの貧しい者を捜しに行った。かれが「父よ」
と言って帰ってきたので、わたしは「はい、子よ」と答えた。トビアはさらにことばを
4 続けて、「父よ、わたしの民のひとりが殺されて、市場に投げすてられています。かれ
は今しめ殺されたばかりです」と言った。 ¬それでわたしは、ごちそうを食べないで飛
5 び出し、広場からその死体を運び、それを葬るために日没まで一つの小屋に置いた。¬そ
6 して帰って身を洗い(2)、悲しみのうちに食事をした。¬わたしは、

「あなたたちの祝いの日は悲しみに変わり、
あなたたちの歌はことごとく嘆きの歌となる」

7 と、預言者アモスがベテルについて語ったことば(3)を思い出して泣いた。 ¬太陽が沈んだ
8 時、わたしは出かけて穴を掘り、その人を葬った。 ¬近所の人々はわたしをあざけって
言った、「この男は、恐れていないのだろうか。今までにもそのことで死刑にされるた
めに捜されており、そして逃げ隠れていたのに、見なさい、また死人を葬っている」。
9 その夜、わたしは身を洗い、家の中庭にはいったが、暑かったので顔におおいをかけ
10

10 ずに、中庭の壁ぎわで横になった。¬しかしすずめ(4)がわたしの上のほうの壁にいるのに
11 気づかなかった。そのあたたかいふんが目に落ち、目に白い膜ができたので、直すため
に医者たちをおとずれた。しかしかれらがわたしの目に薬を塗れば塗るほど、白い膜の
ためにますます見えなくなり、ついに全く失明するに至った(5)。四年間、わたしは目が見
えず、兄弟たちはみな、このことを悲しんだ。アヒカルはかれがエリマイ(6)に行くまで二
か年、わたしを養った。
11 そのころ妻のアンナは女の仕事をして、布と毛を織り(7)*、 12 これをその持ち主に届けて
19

(2) この事件は夏に起こったようであり(9節参照)、また死体に触れる者に関するみそぎの律法(民19$^{11-12}$)が、パレスチナ以外に住むイスラエル人には免除されていた点から見て、トビトが身を洗ったのは、汗と血を洗い清めるためであったと思われる。
(3) アモス8^{10}参照。
(4) ヘブライ語本には「小鳥」、ブルガタ訳には「つばめ」。
(5) トビトの失明はアンモニアを含むすずめのふんによる角膜白はん(斑)症であろう。シナイ本と旧ラテン語訳によれば、トビトは徐々に失明しているが、ブルガタ訳では急性的な失明となっている。ブルガタ訳は2$^{12-18}$で、トビトの試練をヨブのそれと比較して、次のようにしるしている。「しかしながら主は、この試練がかれに臨むことをゆるされた。これは聖なるヨブのように、かれの忍耐の模範を後世の人々に与えるためであった……」。
(6) マカバイ上6^{1}にも出る。それは昔のエラム。この地方はメディアの南、ペルシアの西に位している(創10^{22}14^{1}、ユディト1^{6}参照)。
(7) トビトの失明によって生活のための物資を得る困難もあったので、妻アンナは注文客から生地を受取り、家でこれを縫って収入を得なければならなかった。ブルガタ訳は「女の仕事」を「織物」と書いている。

賃金をもらっていた。ある日、彼女がディストロス[8]の七日に、はたの縦糸を切り、織物を
持ち主に届けると、かれらは全部の賃銀を彼女に支払い、そのうえ、食べるために子や
ぎも与えた[9]。 13 妻が帰って来た時、子やぎが鳴き出したので、わたしは彼女を呼んで、 20 21
「この子やぎは、どこから来たのか。盗んだのではないのか。持ち主に返しなさい。盗
14 んだものを食べるわけにはいかない」と言った。 彼女は、「これは賃銀とは別に、わた
しがもらったものです」と答えた。しかしわたしは彼女を信用しなかったので、「それ
を持ち主に返しなさい」と強く言った。わたしは彼女の行為を恥ずかしく思ったからで
ある。彼女は答えて言った、「あなたの施しは、どこにありますか。どこにあなたの正 22
しい行ないがありますか。今こそ、あなたに関することは明らかです[10]」。

3 1 それでわたしは、いたく心を悩まし、悲しんで泣き、ため息をつ
き、祈りはじめた、

トビトの祈り

2 「主よ、あなたは正しく、
あなたのみわざはすべて正しく、
あなたの道も、すべてあわれみであり、真理であります。
あなたはこの世をさばくおん者です。

3 主よ、今わたしを思い、

み顔をわたしにお向けください。
主よ、わたしの罪とわたしの無知、
またみまえに犯したわたしの先祖の罪のために
わたしを罰しないでください。
4 かれらは主の戒めを破ったので、
あなたはわたしたちを略奪と、とらわれと、死の手に渡されました。
あなたはわたしたちを、すべての異国の民の中にちりぢりにし、
笑いぐさ、あざけり、はずかしめとなさいました。
5 今また、わたしと先祖*の罪のために、
あなたが多くのさばきをなさるのは正しい。
わたしたちはあなたの定めを守らず、

---

(8) マケドニア暦の月の名で、ヘブライ語の「アダル月」(現在の三月)に相当する。アレキサンドロス大王の領地内で広く用いられていた名称。
(9) 昔は往々、報酬として金銭よりも食糧を与えていた。ギリシア語本によれば、アンナはみやげとして子やぎをもらったとなっているが、ブルガタ訳では報酬の形でもらったことになっている。
(10) 昔の人々は一般に、災いは罪の結果であると考えていたが、トビトの妻も、夫の失明について同じように考えている(ヨブ2[9]、ヨハネ9[2]参照)。

6 あなたのみまえに直くあゆまなかったからです。
今こそ、わたしをお望みのままにしてください。
どうぞ命じて、わたしの魂をわたしからお取りください。
わたしは地の面から消え去り、
土にかえりましょう。
わたしにとっては、生きるよりも死ぬほうがましです。
わたしはいつわりの侮辱を聞き、
いたく悲しんでいます。
主よ、どうぞ、わたしをこの悩みから救い、
永遠の住まいに至らせてください。
主よ、み顔をわたしからそむけないでください。
生きながらえてこれほどの悩みに会い、
これほどの侮辱を聞くよりも、
むしろ死ぬほうがましです[1]」。

7 その同じ日に、メディアのエクバタナに住むラグエル[2]の娘のサラ[3]
8 **サラの祈り** も下女のひとりから侮辱のことば[4]を聞いた。 ―彼女は七人の夫[5]と

ついだのであったが、彼女が女の性に従って、かれらといっしょになる前に、悪霊のアスモデウス[6]が、かれらを殺したからである。下女は彼女に言った、「あなたの夫たちをしめ殺した*のはあなたです。あなたは七人のおとこに嫁に行きながら、そのうちのだれの
9 名も名のっていません[7]。 ―あなたの夫たちが死んだからといって、なぜわたしたちを打

【注】(1) トビトは愛する者からも捨てられたが、忍耐強いヨブのように、神に向かって真心から祈った。このような祈りは旧約聖書の随所に繰り返されている（民11 11-15、列上19 4、ヨブ7 15参照）。
(2) ラグエル（「神はかれの友」の意）はトビトの近親（7 2）。エクバタナは、メディアの首都で現在のイランのハマダンの近くにあった。それはまたユーフラテスの谷と、ペルシアとの間に位する要衝の地でもあった。
(3) 「サラ」は王女の意。アブラハムの妻と同一名（創17 15など参照）。
(4) 著者はサラの受けた侮辱をトビトのそれと結び合わせて考える。「その同じ日に」と著者が言っているのは、文学的な表現であって、文字どおりに解する必要はない。著者はこのふたりの義人に対する神の特別な摂理が、同じようなものであったことを教えている。
(5) 「七」はセム族の慣用数で、象徴的意味をもつ不定数でもある。サラは「多くの」または「幾人かの夫」にとついだと解することもできる（士16 13、ルツ4 15、イザヤ4 1など参照）。
(6) アスモデウスの名はペルシア語の「アエシマ・ダエワ」から出た名と説く者もあるが、ヘブライ語の「シャマド」すなわち「破壊者」または「人を滅ぼす者」の意とするほうがよい（サムエル下24 16参照）。アスモデウスは新婚者の敵とみなされている。神がこの悪霊にサラの夫たちを殺させたのは、かれらの結婚の目的が正しくなく、むしろ情欲によるものであったからであろう。
(7) イスラエルの女は妻となる時、夫の名をとり、その名によって自分の名誉をになった。未婚の女（士11 37、サムエル下13 20、イザヤ4 1参照）、または子のない妻（創30 23、サムエル上1 5-11、ルカ1 25参照）は大きな恥であった。

つのですか。かれらといっしょに行ってしまいなさい。わたしたちがあなたのむすこや
娘を永久に見ることがないように」。
10 この日、サラは心から悩んで泣いた。彼女は上にある父のへやに行き、首をくくろう
としたが、もう一度、思いなおして言った、「人々は父をはずかしめて、『あなたには、
たったひとりの愛する娘がいたのに、彼女は自分の不幸のために首をくくってしまっ
た』と、必ず言うでしょう。そうすると、わたしは年老いた父を、悲しみのうちによみ
のくにに落とし入れることになります。わたしは自分で首をくくるよりも、むしろ主に
祈って死なせてもらいましょう。そうすれば、生きながらえて、これ以上、あのような
侮辱を聞くことは、もはやないでしょう」。
11 その時、彼女は窓のほうへ両手をさしのべて祈って言った、(8)
「あわれみの神よ、あなたはたたえられますように。
あなたのみ名は、とこしえにたたえられますように。
すべてのみわざは、とこしえにあなたをたたえますように。(9)
12 今わたしはあなたのほうに顔と目を上げて願います。
13 わたしがあのような侮辱をもはや聞かないために、
この世からわたしを解き放してください。

14 主よ、あなたはごぞんじです。わたしが、どんな男の汚れからも清い身であること
15 とを、
またわたしがとらわれの地にあって、
わたしの名も、父の名も汚さなかったことを。
わたしは父のひとり娘であり、
父のあとつぎは、わたしのほかにはいません。
かれにはわたしを妻として迎えるべき近い親せきはひとりもなく、
また親族の人もいません。
すでにわたしは七人を失いました。
わたしは、なんのために生きているのでしょうか。
もしわたしの死をお望みでなければ、
主よ、わたしをかえりみ、わたしをあわれみ、
あのような侮辱をわたしが決して聞かないようにしてください。(10)*

(8) イスラエル人は、どこにいても祈る時は、エルサレムの神殿に向かって両手をさしのべて祈った(ダニエル6,11(10)参照)。
(9) サラの祈りとトビトの祈りとは似ており、両人の神に対する望みも同じである。
(10) ブルガタ訳では、この祈りのあとに次の句(18—22節)がつけ加えられている。「しかしわたしが夫を迎

16 同じ瞬間に、かれらふたりの祈りは、ともに神のみいつの前に聞
17 きいれられ、―ふたりをいやすためにラファエルがつかわされた。
25 24

トビトとサラの祈り、神に聞き入れられる

これはトビトに対しては、かれがふたたび自分の目で神の光を見ることができるように、その目の白い膜をとってやるためであり、またラグエルの娘サラに対しては、彼女を悪霊アスモデウスから解き放し、トビトのむすこトビアに嫁として与えるためであった。トビアが他のすべての求婚者たちよりも、彼女をめとる資格があったからである。ちょうどその時、トビトは中庭から家にもどって来、ラグエルの娘サラは上のへやからおりて来た。

4

1 その日、トビトはメディアのラゲスに住むガバエルに預けておい
2 たお金のことを思い出した。―そして心の中で、「わたしは今しがた

トビトのすすめ

死を願ったばかりである。なぜ死ぬ前にむすこトビアを呼んで、あ
3 のお金のことを告げないのか」と言って、―むすこトビアを呼んだ(1)。そしてかたわらに
来たかれに向かって言った、「子よ、わたしが死んだら*、丁重に葬ってくれ。母を敬い、
母がこの世にある間、そのかたわらを離れてはならない。母の喜ぶことをし、何事をす
4 るにせよ、母の心を悲しませてはならない。―子よ、おまえがまだ胎内にいたころ、母
5 がおまえのために受けた多くの苦難を思い出しなさい。そして母が死んだら、同じ墓

に、わたしのかたわらに葬ってくれるように。
5 子よ、日ごとに主を思い起こしなさい(2)。罪を犯したり、主のおきてを破ったりしては
6 ならない。おまえは一生を通じて日々、正義を行ない、決して不義の道をあゆんではな
6 らない。―もしおまえが真理に従うならば、正義を行なうすべての人々と同じく、おま
えのわざは栄えるであろう。*

えるのを承諾したのは、あなたを恐れ敬うためであって、わたしの情欲によるものではありませんでした。―わたしが、あるいはかれらにふさわしくなかったか、あるいはおそらくかれらが、わたしにふさわしくなかったからでしょう。―おそらくあなたが、わたしを他の夫のために留めおかれたからでしょう。―あなたの企ては、人間の力の及ぶところではありません。―しかしあなたをあがめる者はすべて、試練にあっては、その生命に栄冠が与えられ、苦しみにあっては救われ、こらしめにあっては、あなたのあわれみにあずかることを確信しています。―あなたは、わたしたちの滅びをお喜びになりません。なぜならあなたはあらしの後には静けさをもたらし、涙と悲しみの後には喜びをお注ぎになるからです。―……」。

【注】(1) 神に死を願ったこの思いは(3 6)、ガバエルに預けたお金(1 14)を死ぬ前にぜひもどしてもらうことを思い出させる。それで子トビアを呼び、お金を取りにラゲスに使いにやるのである。その時、かれは自分の子トビアが肉体においてばかりでなく、精神においても、自分の生き写しとなるように、かれに最後の道徳的、宗教的勧めを与える。この勧告は旧約聖書のクライマックスともいわれる道徳的教え、すなわち両親に対する孝行(3 4節)、神に対する敬愛(5 6節)、他人に対する慈善(7―11節)に基づいて、心理的な順序でなされている。

(2) 宗教上の義務を「主を思い起こす」または「神に仕える」という簡単な句で表わしている(申8 19、シラ2―参照)。

7 おまえの持ち物で施しをしなさい。[4] 貧しい*人に対しては、だれにでも顔をそむけては
8 ならない。そうすれば、神もまたおまえに対してみ顔をそむけないであろう。 ―子よ、
9 できるかぎり施しをしなさい。* おまえが多くの富を持っている時には、多くの施しをし
9 なさい。そして少ししか持っていない時には、それに応じて、ためらわずに施しをしな
10 さい。― そうすることは、おまえの窮乏の日に、とうとい宝を自分のために積むことに
10 なる。[5] ―なぜなら、施しは人を死から救い、やみに陥らないようにするからである。[6] 11 施
11 12 しはこれをするすべての人にとっては、いと高き神のみまえにおけるみ旨にかなうささ
げ物である。

12 子よ、すべての邪いん[7]から身を守りなさい。何よりもまず、先祖たちの末から妻をめ
13 とりなさい。おまえの父の部族でない他の部族の女をめとってはならない。なぜなら、
わたしたちは預言者の子らだからである。子よ、忘れてはならない。ノア、アブラハム、
イサク、ヤコブおよびわたしたちの先祖は、その初めから、みな兄弟の中から妻をめと
り、かれらはその子らにおいて祝福されたのである。[8] かれらの子孫は、地を受け継ぐで
あろう。[9]

13 子よ、おまえの兄弟たちを愛しなさい。またおまえの兄弟たちや、民の子女らに対
14 し、高ぶった心を起こし、かれらのうちから妻をめとるのをいとってはならない。なぜ

14 なら高慢には破滅と絶え間ない不和とがあり、また怠慢には浪費と窮乏とがあるからで
15 ある。まことに怠慢は飢えの母である。 ―おまえのもとで働いている人の賃銀は、明日
まで手もとに留めおいてはならない。それを直ちにかれに与えなさい。[10] そうすれば、お

---

(3) 7―19節aはシナイ本にはない。バチカン本によって補った。なお旧ラテン語訳も参照した。―
(4) トビトは施しの戒めをトビアの心に強く印象づける。これはトビトの道徳的、宗教的特性の一つだからである（1_{3} 1_{10} 2_{2} 2_{14} 12_{8} 12_{9}）。
(5) 施しは神の前に積むとうとい宝であり、神は必要に応じてそれを再び人々に与える（格19_{17}、詩41〔40〕$_{2}$、マタイ5_{7} 6_{20} 6_{25} 6_{27}参照）。
(6) 「人を死から救う」と「やみに陥らないようにする」とは同義句（詩88〔87〕$_{13}$、ヨブ10_{21} 10_{22}、伝11_{8}参照）。―
昔のヘブライ人は、死によって人間の霊魂は、シェオル（地下、よみのくに）またはやみに落とされるが、施しによって地上的生命が長くなり、暗黒からのがれることができると考えていた。しかし、しだいに施しの深い意味が明らかとなり、その霊的効果が認められるようになった。ブルガタ訳（11節）は、「施しはすべての罪と死から解き放ち」としるして、このことをよくあらわしている。
(7) トビトはトビアに対して、良習に従い、特に性の不純を避けるようにすすめている。ギリシア語の「ポールネイア」は、邪いんの意で、既婚の女と接することであるが、預言書では、おもに神に対するイスラエルの不信実を意味する（エゼキエル16_{15}―$_{41}$ 23_{7}―$_{35}$参照）。
(8) これは血の純潔と愛国心から出た勧告。太祖については創11_{29} 24_{1}―$_{9}$ 28_{1}―$_{4}$参照。
(9) 「地を受け継ぐ」とは、本来太祖に約束された聖地カナンを受け継ぐこと（レビ20_{24}、申4_{22}参照）を意味する。なおこれに基づいて、イスラエル人に対する神のすべての約束にあずかること（詩37〔36〕$_{9}$ $_{11}$ $_{22}$ 69〔68〕$_{36}$ $_{37}$参照）を意味し、さらにメシアの国に加わる意味にもなる（詩25〔24〕$_{13}$、イザヤ60_{21} 61_{7}、マタイ5_{5}参照）。
(10) レビ19_{13}、申24_{14} $_{15}$参照。

まえが神に仕える時、おまえに報いが与えられるであろう。子よ、すべての行ないに注
15 意し、すべてのふるまいに節度を守りなさい。 ¬おまえ自身がきらうことを他人にして
16 はならない。[11] 酔うまでぶどう酒を飲んではいけない。旅にあって暴飲に身をやつしては
17 ならない。¬飢えた者にはおまえのパンを分け与え、裸の者にはおまえの着物を分け与え
なさい。余分なものはすべて施しとして与えなさい。そして施しをする時は、惜しそう
18 な目をしてはならない。 ¬義人らの墓の上でおまえのぶどう酒を注ぎ、おまえのパンを
19 裂きなさい。[12]* しかし罪びとには何物も与えてはならない。 ¬すべての思慮深い人から助
20 言を求めなさい。そして有益な助言をさげすんではならない。 ¬ただ常に主なる神をた
たえ、おまえの道を直くし、おまえの歩みと企てとが栄えるように神に祈りなさい。な
ぜなら、どんな人*も助言を与えることができない。ただ主だけが、ご自分の欲する人に
すべてのよいもの*を与えられるからである。かれは思いのままに人をよみのくにまでお
ろされる。さて子よ、これらの戒めをおぼえ、おまえの心から消え去らないようにしな
さい。

21 子よ、今わたしはメディアのラゲスに住むガブリの子ガバエルのもとに銀十タラント
23 を預けていることを、おまえに告げる。 ¬子よ、わたしたちが貧しくなったことを憂え
てはならない。おまえが神を恐れ敬い、すべての罪を避け、おまえの主なる神のみまえ

に善を行なうならば、多くの財産を持っていることになる[13]」。

5 1 トビアはそこで父トビトに答えた、「父よ、わたしはあなたが命
2 じたことをみな果たしましょう。 ¬しかしどうすれば、かれからお

トビアの友、天使ラファエル

金を返してもらえるでしょうか。かれはわたしを知っていません。
またわたしもかれを知りません。かれがわたしを認め、わたしを信
3 じ、わたしにお金を渡すためには、かれにどんな証拠を示せばよいのでしょうか。わた
しはまたメディアへ行く道も知りません」。「トビトはむすこトビアに答えて言った、「か
れはわたしのために署名し、わたしはかれのために署名した。そして互いに一通ずつを
受取るために二つに裂き、わたしはその一つを取り、他の一つをお金*といっしょに置い

---

(11) 旧約聖書中、消極的ながら初めて愛の黄金律が明らかにされている。しかし新約聖書では、積極的に「人人からしてほしいと望むことを人々にもそのとおりにせよ」と説かれている（マタイ7[12]、ルカ6[31]、ローマ13[9]参照）。

(12) 「ぶどう酒を注ぎ、パンを裂く」とは、食事を取ることを意味する。ここに「墓の上で」とあるのは、ヘブライ人が異教徒の慣習に従って、墓にパンを供え、またぶどう酒を注いでいたというのではない。ヘブライ人が墓場で食事をしたのは、遺族を慰めるためであった（エレミヤ16[7]、エゼキエル24[17]参照）。ヘブライ人のこの慣習は、初代キリスト教徒に伝えられ、かれらはカタコンブで死者を記念して食事をした。この食事には貧者も招かれた。

(13) 人間の本当の宝は、宗教と徳である。これを持つ人は物質的な財産はなくとも恥ではない。

てきた。[1] わたしがそのお金を預けたのは、今から二十年前のことである。子よ、おまえはまたいっしょに旅をするのに、信頼できるひとりの男を捜しなさい。わたしたちはかれに報酬を与えよう。さあ、わたしがまだ生きている間に*、かれからそのお金を受け取ってきなさい」。

4 そこでトビアは、メディアへの道をよく知り、自分といっしょに行ってくれる男を捜
5 すために外に出た。かれは外に出て、自分の前に立っている天使ラファエルを見つけ
6 た。しかしかれが神の使い[2]であるとは知らなかった。「それでトビアがかれに、「若者
7 よ、あなたはどこのかたですか」と聞くと、その若者は、「わたしは、あなたの兄弟で
あるイスラエルの子らのひとりです。ここに働きにきました」と答えた。トビアがま
6 た、「あなたはメディアへ行く道を知っていますか」と尋ねると、「かれは答えた、「は
8 い、わたしはしばしばそこに行ったことがあります。またどの道も通り、よく知って
ます。何度もメディアに行って、メディアのラゲスに住むわたしたちの兄弟ガバエルの
家に泊まりました。そこはエクバタナから歩いて、ちょうど二日の所です。[3] ラゲスは山
7 の中にありますが、エクバタナは平野の中央にあります*」。「そこでかれが、「若者よ、
9 家にはいって父に知らせてくるまで待っていてください。わたしにはあなたが道連れと
8 して必要です。報酬は与えます」と言うと、「かれは、「はい、待っています。ただし遅

くならないようにしてください」と答えた。

9 トビアは中にはいり、父トビトに、「今、わたしはイスラエルの子らで、わたしたち
10 の兄弟のひとりを見つけました」と知らせた。父はかれに言った、「子よ、その男を呼
びなさい。その男がどの血統で、どの部族の者か、またその男がおまえといっしょに旅
行するのに信頼できるかどうかを知りたいから」。

10 トビアは外に出て、かれを呼んで言った、「若者よ、わたしの父があなたを呼んでい
11 ます」。かれが中にはいると、トビトがまずかれにあいさつをした。次にかれがトビト
12 に、「大きな喜びが、あなたにありますように[4]」と言うと、トビトは答えて言った、「こ

【注】(1) 証文の数は写本によって異なる。バチカン写本とアレキサンドリア写本、ならびにブルガタ訳本によれば、それは一つであって、トビトが保管していたとなっている。しかしシナイ写本と旧ラテン語訳は、二つの証文についてしるし、一つはトビトのもとに、もう一つはガバエルのもとに、お金といっしょに置いてあったとしている。

(2) 「神の使い」または「ヤーウェの使い」は、太祖時代には人間に現われた神を意味していた(創16$_{7}$、同注5参照)。しかしここでは霊体の被造物である天使を意味している(なお列上22$_{19}$、詩29〔28〕$_{1}$、ヨブ1$_{6}$2$_{1}$参照)。天使についての教理は、しだいに発展し、新約聖書においては、更に完全になる。天使ラファエルの本来の意味は「神の薬」。かれは人間の姿でトビアに現われ、また自然界の事がら(6$_{7}$—9$_{17}$)や、秘密な事がら(6$_{11}$12)、メディアの事情(6節)などを良く知っている。これはすべて天使のすぐれた本性によるものである。

(3) エクバタナからラゲスまでの距離は、徒歩で一週間かかる。著者はこの距離を的確に示しているのではなく、単に遠距離であることを示している。

(4) ヘブライ人は、このような表現であいさつする。かれらは普通「シャロン・ラク」と言ってあいさつして

れからどのような喜びが、わたしに与られると言うのですか。わたしはもはや自分の目
を使うことのできない人間であり、天の光も見ることができません。もはや光を見るこ
とのない死人のように、やみのなかに沈んでいます。生きていても死人の仲間です。人
の声は聞こえますが、人を見ることはできません」。かれは言った、「元気を出しなさ
い。神はまもなくあなたを直してくださるでしょう。元気を出しなさい」。トビトは言っ
た、「わたしの子トビアは、メディアに行こうとしているのです。あなたはいっしょに
行って、かれを案内することができますか。兄弟よ、わたしはあなたに報酬を与えます」。
ラファエルは答えた、「わたしはかれといっしょに行くことができます。わたしはすべ
ての道を知っています。しばしばメディアへ行き、そのすべての平野や山々を横断しま
した。それでそこへ行くどの道でも知っています」。「そこでトビトは尋ねた、「兄弟よ、
あなたは何族の、何家のかたですか。兄弟よ、教えてください」。「かれは言った、「な
ぜあなたはわたしの血統とか部族とかを知る必要があるのですか。あなたは雇い人を求
めているのに、なぜわたしの血統や部族のことを尋ねるのですか*」。トビトは言った、
「兄弟よ、わたしはあなたの部族*と、あなたの名まえを知りたいのです」。「ラファエル
は言った、「わたしはあなたの兄弟である偉大なアナニアの子、アザリアです[5]」。
トビトはかれに言った、「ようこそ！ 兄弟よ、平安あれ。兄弟よ、わたしがあなた

の部族*について知りたがったのを、おこらないでください。あなたがすぐれた良い家が
らの出であり、わたしの兄弟のひとりであるとは、思いがけないことです。わたしは偉
大なセメイアのふたりの子、アナニアとナタンとを知っています。かれはわたしといっ
しょにエルサレムへ行き、そこでいっしょに礼拝し、迷いの道にはいることはありませ
んでした。あなたの兄弟であるかれらは善人で、あなたは高貴な血すじに属しています。
ようこそ来られました」。「それからかれは言った、「あなたに報酬として一日一ド
ラクマと、またむすこと同じように、あなたが必要とするものを与えましょう。」わた
しのむすこといっしょに旅をしてください。そうすれば、あなたの報酬をいくらか増し
ましょう[6]」。ラファエルは答えた、「「わたしはかれといっしょに旅をしましょう。どう

いた。ギリシア人の間では「カイレイン・ソイ」があいさつのことばとなっていた。これらのことばはいずれも、「平和」、「喜び」または「元気であること」を意味する。

(5) 天使は、人間の系図に当てはめて、自分を「アナニアの子、アザリア」と言っているが、これは「ラファエル」という名と同様、天使としてのかれの使命に適合した名である。すなわち「アザリア」は「神の助け」、「アナニア」は「神の恵み」の意。

(6) トビトは案内者に報酬として一日一ドラクマと、そのほかに毎日の食事と宿泊料とを支給し、また旅行の終わりには、謝礼として余分の金を与える約束をした。現在でも地中海沿岸地方では、同様の風習があって旅行者は案内者とたいていこのような契約をする。銀貨一ドラクマはローマの一デナリ（マタイ20[2]参照）と同じく、勤労者の一日の報酬である。

かご心配なく。わたしたちは元気で出発し、元気であなたの所に帰ってきます。途中は
危険がありませんから」。トビトは言った、「兄弟よ、元気で行って来なさい」。それか
らかれはむすこを呼んで言った、「子よ、旅に必要なものを整え、兄弟といっしょに出
発しなさい。天にいます神が、あなたたちをあそこで守り、元気でわたしの所に連れも
どしてくださるように。子よ、神の使い(7)が、あなたたちとともにいて、無事であるよう
に」。

トビアの旅

トビアは旅に必要なものを整え*、家を出て旅立った。かれが父と
母に接ぷんすると、トビトはかれに言った、「元気で行きなさい」。
母はその時、泣き出してトビトに言った、「なぜ、わたしの子を旅
立たせるのですか。かれはわたしたちの手のつえではありませんか。わたしたちの前で
出入り(8)しているのではありませんか。-お金にお金を加えないで、それをないものと思
い、わたしたちの子を守りましょう。-主がわたしたちの生活のために与えてくださっ
たものだけで十分です」。-かれは彼女に言った、「何も心配することはない。むすこは
元気で出発し、元気でわたしたちのもとにもどってくるであろう。そしてかれが元気
で、あなたのところにもどってくる日、あなたの目はかれを見るであろう。-だから妹
よ、何も心配することはない。かれ*のために恐れてはいけない。よい天使が、かれとと

もに行き、かれの旅は成功し、元気で帰ってくるであろう」。-それで彼女は泣きやんで
静かになった。

6

不思議な魚

若者は天使といっしょに旅に出た。犬もかれとともに出発し、か
れらについて行った。こうしてふたりは旅に出た。夜になってかれ
らはチグリス川(1)のほとりで一夜をあかした。-さて、若者は足を洗
うため、チグリス川におりた。その時、大きな魚(2)が水中から飛び出し、若者の足にかみ
つこうとしたので、大声をあげた。-天使が若者に、「魚を取りおさえなさい」と言った
ので、若者は魚を捕えて岸に引き上げた。-天使はかれに言った、「魚をひらいて、胆の
うと心臓と肝臓とを取り出して保存し、はらわたは捨ててしまいなさい。その胆のうと

---

(7) トビトの祝福のことばは、大祖アブラハムのそれに似ている(創24 7参照)。昔からヘブライ人は守護の天使を信じていた(出23 20、詩91[90]11参照)。教会はトビトのこの祝福のことばを旅行者のための祈りとして現在も用いている。

(8) ヘブライ人独特な表現。家庭の中心であり、世話役であることを表わしている(民27 17、サムエル上18 13 16、使1 21参照)。トビアは両親が老齢であったので、かれらのつえの役目をなした。

【注】(1) ヒデケル川に同じ。この大河はアルメニア山に源を発し、アッシリアとメソポタミアを流れ、南のほうユーフラテス川と合流し、ペルシア湾に注ぐ。ニネベはこの川の東岸にある。エクバタナへの道は、初め川岸に沿って南下するが、やがて東に折れる。このふたりは一日歩いても、まだチグリス川のほとりにいる。

(2) どんな種類の魚であったか不明。現在もチグリス川には、二メートルにも及ぶ大魚がいる。

5 心臓と肝臓とは、薬として役に立ちます[3]」。—それで若者は魚をひらき、胆のうと心臓と
肝臓とをいっしょにしておいた。それからその魚の一部を焼いて食べ、残りを塩づけに
6 した。—ふたりはいっしょに旅をつづけ、メディアに近づいた。
7 青年は天使にたずねた、「兄弟アザリア、あの魚の心臓と肝臓と胆のうとには、どん
8 な効能がありますか」。—天使は答えた、「もし悪魔または悪霊につかれている男または
女の前で、その魚の心臓と肝臓とをくゆらすと、あらゆるのろいはかれから遠ざかり、
9 決してふたたび宿らないでしょう。—胆のうは白い膜のできた人の目にそれを塗りなさ
い。白い膜の上に息を吹きかけると、目が直ります」。
10 かれら*はメディアにはいり、すでにエクバタナに近づいていた。—そのとき、ラファ
エルが若者に、「兄弟トビアよ」と言うと、かれは「はい」と答えた。ラファエルはト
ビアに言った、「わたしたちは今夜、ラグエルの家で過ごさなければなりません。その
12 人は、あなたの親族で、サラという名の娘を持っています。—かれにはサラひとりだけ
でむすこも娘もほかにいません。あなたはすべての男の中で、いちばん近い親族ですか
ら、彼女をあなたのものとすべきであり、彼女の父の財産は、当然あなたが受け継ぐべ
きものです[4]。あの娘は賢く、勇気があり、非常に愛らしく、父は彼女を愛しています*」。
13 ラファエルはつづけて言った、「ですから、彼女をめとるのは、あなたの権利です。兄

弟よ、わたしの言うことを聞きなさい。わたしは今晩、彼女をあなたのいいなずけにし
てもらうように、父親にあの娘のことについて話しましょう。そしてわたしたちが、ラ
ゲスからもどって来るとき、結婚の祝いをしましょう。わたしはラグエルが彼女をあな
たに拒むことも、また他の男に嫁にやることもできないのを知っています。そのような
ことをすれば、かれはモーセの書の定めに従って、死に処せらるべきものとなるでしょ
う。かれの娘の相続財産はあなたのものであり、また他のだれよりも、あなたが彼女を
めとるべき者であることを、かれは知っています。兄弟よ、さぁ、わたしの言うことを
聞きなさい。わたしは今夜あの娘のことを話し、あなたと婚約させましょう。ラゲスか
らもどって来るとき、彼女と結婚して、あなたの家にいっしょに連れて帰りましょう」。
14 トビアはラファエルに答えて言った、「兄弟アザリア、彼女は今までに七人の男に与
えられたが、かれらは婚礼の寝室で死んだことを聞きました。その晩、彼女の所にはい
15 って死にました。またわたしは悪魔がかれらを殺したと、人が言うのも聞きました[5]。—今

(3) 天使はこう言ったあとで、トビトとサラが、これらによってその災いから救われるのを暗示する(8—9節参照)。昔は魚の胆じゅうは、ある種の病気の特効薬とされていた。
(4) 律法書によると(民27₈ 36₆—₈参照)、男の子のない父は、娘に遺産を継がせることになっている。離散しているユダヤ人の娘も、太祖のならわしと律法の精神に従って、同族の中から夫を求めていた。これは家族の財産が分散しないようにするためである(民36—₁₂参照)。
(5) メディアとアッシリアとの間の交通は、当時盛んであったので、ニネベのトビアが、サラに起こったこと

わたしは恐ろしい。悪魔が彼女を愛しているからです。悪魔は彼女自身には何も悪いことをしませんが、だれか他の男が彼女に近づこうとすると、その男を殺すのです。わたしは父のひとり子ですから、もし死ぬようなことがあれば、父母を悲しませ、かれらの命を墓に落とすことになるでしょう。父母を葬るべきむすこは、わたしのほかにいません。」

16 「ラファエルはかれに答えた、「父かたの家から妻をめとることを命じた父のことばを、あなたは覚えていませんか。兄弟よ、さぁ、わたしの言うことを聞きなさい。あの悪魔のことを気にせず、彼女をめとりなさい。今夜にも、彼女が妻としてあなたに与えられることを、わたしは知っています。

17 あなたが婚礼の寝室にはいるとき、あの魚の肝臓と心臓とを取り、燃えている香の上にのせなさい。するとかおりが立ちのぼり、悪魔はそれをかいで逃げ去り、そして永遠に彼女の身近に現われることはないでしょう。

18 またあなたは彼女といっしょになる前に、ふたりともまず起きて祈り、あなたたちの上に、あわれみと救いとがくだるように、天の主に願いなさい。恐れてはいけません。彼女は初めから、あなたのものと定められていたのです。あなたは彼女を救い、彼女はあなたについて行くでしょう。あなたは彼女によって子どもをもうけ、かれらはわたしにとって兄弟のようになるだろうと信じています。ですから、心配してはなりません」。

19 トビアはラファエルのことばを聞き、彼女が父かたの直系で、自分の妹であるこ

とがわかったとき、かれはサラを深く愛し、その心は彼女と固く結びついた。

7

1 **ラグエルのもてなし**

かれらがエクバタナに到着した時、トビアは友に言った、「兄弟アザリア、早くわたしたちの兄弟ラグエルのもとに案内してください」。ラファエルはかれをラグエルの家に案内した。かれらはラグエルが中庭の入口のそばにすわっているのを見つけ、さきにかれにあいさつした。ラグエルは、「兄弟たちよ、ようこそ、よくおいでになりました。心からお迎えします」と言い、かれを家に招きいれた。

2 かれは妻エドナに言った、「この青年

を知っていたということは容易に理解できる。

(6) 当時の一般的伝説により、トビアは悪霊アスモデウス(3 8)が、サラを愛していたので、しっとのために男を殺すのだと考えていた。自分の生命を失うことを恐れ、その悪霊と全然無関係でありたいと願っている。そこで天使は勇敢にサラをめとるようにすすめた。

(7) 天使は悪霊を追い出すための方法として、魚の心臓と肝臓をくゆらすこと、また祈りをささげることを勧める。このような方法は、当時のアッシリアやバビロニアで、また後代のユダヤ人の間で、悪魔はらいのために用いられていた。

【注】(1) 東洋人は特に同国人に対するもてなしの義務をよく守った。ラグエルはこのふたりの旅人の服装や顔つきを見て、直ちにかれらがイスラエル人であることがわかった。

(2) ブルガタ訳では「アンナ」。「エドナ」という名は、普通男性名(＝アデナ。歴下17 14、エズラ10 30、ネヘミヤ12 15参照)。女性名としては、旧約聖書では本書にのみ出る。聖書外典の「ユビレの書」4 27にも女性名として用いられている。

3 は、わたしの兄弟トビト*と、なんとよく似ていることだろう」。―エドナはかれに、「兄
弟たちよ、あなたがたはどこのかたですか」と尋ねて言うと、かれらは言った、「わた
4 したちは、ニネベに捕えられて行ったナフタリの子らです」。―彼女が、「あなたがたは、
わたしたちの兄弟トビトを知っていますか」と尋ねると、ふたりは、「はい、知って
5 います」と答えた。―また、「かれは元気でいますか」と聞くと、かれらは、「元気で暮ら
6 しています」と答え、続いてトビアは、「かれはわたしの父です(3)」と言った。―そこでラ
グエルはおどりあがり、かれに接ぷんをし、涙を流して言った、「あのようにすぐれて 7
よい父をもつ若者よ、祝福されよ(4)。あのように正しく、かずかずの慈善をした人が、め
くらになったとは、なんと不幸なことであろう」。そしてラグエルは泣きながら、兄弟
7 トビアの首に身を投げかけた。―妻エドナも泣き、かれらの娘サラもまた泣いた。8 かれ 8
らは家畜の群れの雄羊を一頭ほふり、心からかれらをもてなした。
9 かれらがからだを清め、手を洗って食卓についた時、トビアはラ
サラの婚約 ファエルに言った、「兄弟アザリア、妹のサラをわたしの妻にして
10 くれるように、ラグエルに話してください(5)」。―ラグエルはこのこと
ばを聞き、若者に言った、「兄弟よ、今夜は大いに食べ、飲み、そして陽気になさい。
あなたのほかに、わたしの娘サラをめとる資格のある人はいないのですから。そのう

え、わたしには、あなた以外の人に娘をやる権利がありません。なぜなら、あなたはわ
たしのいちばん近い親族だからです。しかし子よ、わたしはあなたに真相を話さなけれ
11 ばならない。―わたしは今までに娘を七人のわたしたちの兄弟に嫁にやったが、みなサラ 11
の所にはいったその夜、死んでしまった。だが子よ、今は大いに食べ、飲みなさい。主
12 があなたがたに慈悲と平安*とをお与えになるでしょう」。―トビアは言った、「あなたが 10
わたしの事を決めないうちは、食べも飲みもしません」。そこでラグエルは言った、「で
は決めましょう。モーセの書の定めに従って、娘はあなたに与えられます。娘があなた
に与えられることは、天によって定められています。あなたの妹を取りなさい。今から
あなたはその兄であり、彼女は妹です。きょうから、また永遠に、娘はあなたに与えら
れます。子よ、天の主が、今夜、あなたがたに恵みを与えてくださるでしょう。また慈
13 悲と平安をたれてくださいますように」。―ラグエルが娘サラを呼ぶと彼女は来た。かれ 15

---

(3) これらのかずかずの質問と全く似た質問が創世記に見られる(創29$_{4-6}$参照)。
(4) イスラエル人は、親族や同国人に対してはあいさつのことばとともに、接ぷんし、抱き合った。特に老人は若い人に対して祝福のことばを与えるのを習慣としていた。
(5) この事は、イサクのために妻を迎えに行ったアブラハムの召使に関する記事と似ている(創24$_{32}$以下参照)。もてなしを受ける前に足を洗い身を清めることは、当時の習慣であり(創18$_{4}$ 19$_{2}$参照)、その後、食事が出るのが普通であった(創18$_{6-7}$参照)。

はその手をとり、彼女をトビアに与えて言った、「娘を取りなさい。彼女はモーセの書
にしるされている律法と定めに従って、あなたに妻として与えられるべき身です。娘を
めとって、喜びのうちに、父のもとへ連れて行きなさい。天の神があなたがたに安全な
旅をさせてくださいますように(6)」。14 ラグエルは娘の母を呼び、巻物をもってくるように
言った。ラグエルはモーセの律法の定めに従って、トビアにサラを妻として与える結婚
誓約書をしたため、これに印を押した(7)*。17 それからかれらは飲食をはじめた。16
15 ついでラグエルは、妻エドナを呼んで言った、「妹よ、他の寝室を整え、そこへ彼女
を連れて行きなさい」。16 エドナは行き、かれが命じたように寝室を整えた。19 それからそ
こへ娘を連れて行き、その身の上を嘆いた。17 やがてエドナは涙をぬぐい、18 「娘よ、元
気を出しなさい。天の主が悲しみの代わりに喜びを与えてくださいますように。娘よ、
元気を出しなさい」と言って外へ出た。20

8

1 かれらは食べたり飲んだりした後、寝ようと思った。そこで人々
2 **悪魔の退散と** は若者を導いて寝室に連れて行った。3 その時、トビアはラファエ
ふたりの祈り ルのことばを思い出し、袋に入れておいた魚の肝臓と心臓を取り出
し、燃えている香の上にのせた。4 悪魔は魚のにおいで追い出され(1)、
エジプトのはて*へ逃げ去った(2)。5 ラファエルはそこへ行き、かれをその場でしばり(3)、直ち

に帰って来た*。6 他の人々は寝室から出て戸をしめた。トビアは床から起き上がり、サ
ラに言った、「妹よ、起きなさい。神がわたしたちにあわれみと救いを与えてくださる
ように祈り、願いましょう」。7 彼女は起き上がった。8 かれらは救いが与えられるように
祈り、願いはじめた。トビアは口を開いた、

---

(6) ヘブライ人の結婚式についての詳細な叙述は、本書だけに見られる。父は娘の右手を取り、新郎の右手と握手させ、新郎に彼女を新婦として与える。結婚式中に、新郎新婦が握手をする習慣は、ギリシア人やローマ人の間にもあった。この習慣は現在もキリスト教の結婚式に見られる。なおサラの父は新郎新婦に祝福のことばを与えているが、教会は、ブルガタ訳のこの箇所(7 15)に含まれている祝福を婚姻のミサ聖祭の終わりに、祝福のことばとして用いている。すなわち「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神が、あなたがたとともにいまし、あなたがたを結び、その祝福をあなたがたの上に豊かに与えてくださいますように」。

(7) 当時のアッシリアとバビロニアの結婚誓約書は、現在もロンドンの大英博物館に多く保存されている。

【注】(1) 悪霊アスモデウスが追い出されたことは大事件であるが、ここでは簡単にしるされている。悪霊が燃えている香の上にのせられた魚の肝臓と心臓のにおいで寝室から追い出されたことは、聖水をもって悪霊を追いはらう教会の準秘跡に似ている。悪霊を追い出す力を持っているのは神だけであるが、神はそのような場合、自分の力を現わす手段として特定の物質を用いることができる。

(2) ヘブライ人などの東洋人が行なっていた悪魔はらいのことばの中では、悪霊の住む荒れはてた地の一例として「エジプトのはて」が用いられていた(イザヤ5 26参照)。悪霊は自分の住まいとして、このようなさばくや荒れ野(マタイ12 43、ルカ8 29)を選ぶ(なおイザヤ13 20 21 34 13 14、バルク4 35参照)。

(3) 擬人的な表現を用いて天使の使命をはっきりと表わしている。天使によって悪霊アスモデウスが追い出されたことは決定的な事であり、以後、かれは人間に悪を及ぼすことができない。

「われわれの先祖の神よ、
あなたは賛美されますように。
あなたの名がいつの世までも賛美されますように。
天とすべての被造物とが、
幾千代までもあなたをほめたたえますように。
あなたはアダムを造り、
その妻エバをかれの助け手、ささえ手としてお造りになりました。
そして人のすえはこのふたりから生まれました。
あなたは仰せられました、
『人がひとりでいるのはよくない。
われわれはかれにふさわしい助け手を造ろう』。
主よ、あなたはご存じです。*
今、わたしがこの妹(4)をめとるのは、
決して情欲のためではなく、まごころからです。
わたしと彼女とにあわれみをたれ、
ともに老いるまで生きながらえさせてください」。

そしてかれらはともにアーメン、アーメンと言い、9その夜、安眠した。

ラグエルの感謝の祈り

ラグエルは起きて召使たちを呼び、ともに出かけて墓を掘った。かれは、「もしトビアが死んで、わたしたちが笑いとあざけりのまとになるといけないから」と言った。10かれらが墓を掘り終わるとラグエルは家にはいり、妻を呼んで、11言った、「トビアが生きているかどうか、女中のひとりをへやに見にやりなさい。もし死んでいたら、だれにも知られないように、かれを葬ろう」。12彼女*は女中を見にやった。女中がランプをともし、とびらを開いてなかにはいって見ると、ふたりはともに伏して寝ていた。13女中はそこを出て、かれが生きており、別に変わったことはないと、かれに告げた。14そこでラグエル*は天の神を賛美して言った、

「神よ、あなたは、すべて清くとうとい*賛歌をもってたたえられますように。
あなたのすべての聖人と被造物とが、*
幾千代にわたって、あなたを賛美しますように。
賛美されますように、あなたはわたしに喜びをお与えになったからです。

(4) ここでトビアが「妻をめとる」と言わずに、「妹をめとる」と言っているのは、かれが潔白な心で結婚することを示すためである。

わたしが予感していたようには事は起こらず、
かえってあなたは深いあわれみをもってわたしたちをお計らいになりました。
賛美されますように、あなたはこのふたりのひとり子たちに
あわれみをたれてくださったからです。
主よ、かれらにあわれみと救いを与え、
かれらの一生が喜びとあわれみに満たされますように」。

17 18 19 20 21 22 23 24

かれは召使たちに言いつけて、日の出前に墓を埋めさせた。19それからラグエルは妻にパンをたくさん造るように言った。またかれは家畜の群れの所に行き、二頭の雄牛と四匹の雄羊とを連れてきて用意させた。それでかれらは食事の用意を始めた。20それからかれはトビアを呼び、誓って*かれに言った、「あなたは十四日間(5)、ここを去ってはいけません。ここに留まって、わたしと飲食をともにし、苦しみ悩んできた娘の心を慰めてください。21それからわたしの全財産の半ばを直ちに取り、元気で父のもとへ帰りなさい。残りの半ばは、わたしと妻の死後、あなたたちのものになります。子よ、元気を出しなさい。わたしはあなたの父であり、エドナはあなたの母です。わたしたちは、これから末長く、あなたと、あなたの妹のものとなります。子よ、元気を出しなさい」。

9

1 その時、トビアはラファエルを呼んで言った、2「兄弟アザリア

ラファエル、預金を受け取る

よ、四人の召使(1)と二頭のらくだ(2)とを連れて、ラゲスに旅立って、ガバエルの所に行き、証文を手渡し、お金を受取り、かれを結婚式に連れて来てください。3-4あなたも知っているとおり、父は日を数えています。一日でも帰りが遅れると、父に非常に心配をかけることになります。5またあなたはラグエルが誓ったことを(3)、よく知っています。わたしはその誓いにそむくことができません」。6そこでラファエルは四人の召使と二頭のらくだとを連れて、メディアのラゲスに向かって旅立った。7かれらはガバエルのもとで宿り、ラファエルはガバエルに証文を手渡した。またかれはトビトの子トビアが妻をめとり、ガバエルを結婚式に招いていることを告げた。ガバエルは立ち上がり、封印をした袋を数え、人々はこれをらく

---

(5) ラグエルは心から喜びを表わし、婚礼の祝いを長く続けるようにすすめた。普通は一週間であるが（創29 27、士14 12参照）、これを二週間も続けた。婚礼の祝いは、新婦を新郎の家に連れて行き、そこで祝うのが普通である。

【注】(1) バチカン本によれば、召使は一名となっている。

(2) 二頭のらくだは、お金を運ぶためである。このらくだは二つこぶのトルコらくだで、メディアのような亜熱帯地方に適しているが、一つこぶのアラビアらくだは熱帯地方で使われる。

(3) 8 20参照。

6 だ*に積んだ。―かれらは朝早くいっしょに起き、結婚式に行った。(4) ラグエルの家にはいると、トビアは食卓についていた。トビアはすぐに立ち上がり、ガバエルにあいさつをした。ガバエルは涙を流してトビアを祝福して言った、「正直で善良な若者よ、正直な、8 9 善良な、方正な、慈悲深い人の子よ、天の主*が、あなたとあなたの妻、また彼女の父母*10 にも祝福を与えてくださいますように。神は賛美されますように。いとこのトビトに生き写しであるあなたに会ったからです(5)」。

10

1 さて、トビトは来る日も来る日も、行きに何日、帰りに何日と、

父母の憂い(1)

2 日数を指折り数え続けた。しかしその日数が過ぎても、むすこは姿を現わさなかった。―かれは言った、「おそらくむすこはあそこで引き止められているのではなかろうか。それともおそらくガバエルがなくなっていて、だ3 れもお金を返す人がいないのではなかろうか」。―それでかれは心配しだした。4 妻アンナは言った、「あの子はもうなくなり、もはや生きた人々の中にはいないでしょう。こ5 んなに遅くては*」。そしてむすこのために悲しみ、泣き出して言った、―「あゝ、悲しい。子よ、あなたを、わたしの目の光であるあなたを旅に出させたとは(2)」。―トビトは彼6 女に言った、「妹よ、静かになさい。心配することはない。あの子は元気でいる。かの地で何かやっかいなことでも起こったのだろう。むすこといっしょに旅に出た人は信頼

のおける人で、わたしたちの兄弟のひとりです。だから妹よ、あの子のことを嘆いては7 いけない。かれは間もなく帰って来るでしょう」。―すると彼女は、「わたしに何も言わないでください。いい加減なことを言わないでください。あの子はなくなったのです」と言った。そして日ごと、何も食べないで*、早くから外に出て、むすこが出て行った道

---

(4) 天使ラファエルは、足の速いらくだに乗って、エクバタナとラゲスの間を二週間で往復し、またガバエルも結婚式に間に合った。

(5) ガバエルは東洋人的愛情をもってトビアとその妻、および妻の両親を祝福した（ただし原文批判 9 6 の後者参照）。この祝福のことばはバチカン本にはない。ブルガタ訳（11節）は次のような祝福のことばを付け加えている、「またあなたがたは、あなたがたの子らと、あなたがたの子らの子らを、三代、四代に至るまで見ることができますように。またあなたがたの子孫は、代々に治めたもうイスラエルの神に祝福されますように」。このことばは現在も婚姻のミサ聖祭中に唱えられる。

【注】(1) お金の返還およびトビアとサラの結婚をもって本書の第一幕が終わり、10章以下はトビトの目の回復を主題とする第二幕となっている。10章には、ふたつの美しい事件の場面がある。一つはニネベ（1―7節）でトビトとその妻アンナがトビアの帰りの遅いのを心配している場面であり、他の一つはエクバタナ（8―11節）でトビアが両親に心配をかけないように帰りを急いでいる場面である。

(2) トビアの母アンナは苦しみに耐えきれず、むすこが死んだと思って嘆いた。「目の光」という表現は、母の愛情を端的に表わしている。ブルガタ訳では、アンナの嘆きを次のように、もっと長くしるしている。「ああ、わたしは災いです。わたしの子よ、どうしてわたしたちは、あなたを旅に出したのでしょう。あなたはわたしたちの目の光、わたしたち年寄りのつえ、わたしたちの一生の慰め、わたしたちの子孫の希望です。わたしたちは、あなたひとりにいっさいを託しているのですから、わたしたちのもとから、あなたを去らしてはならなかったのです」（4―5節）。

を見守り、だれの言うことも聞き入れなかった。日が沈むと、家にはいり、夜もすがら
泣き悲しみ、少しも眠らなかった。

トビアたち家路につく

8 さてラグエルが娘のために行なうと誓った婚礼の十四日間が過ぎ
ると、トビアはかれに近づいて願った、「今こそ、わたしにいとま
ごいをさせてください。父母はもはやわたしに会えないと思ってい
るに違いありません。だから父よ、お願いです。今こそわたしにい
とまごいをさせて、父のもとに帰らせてください。わたしがどのようにして父と別れて
9 きたかについては、すでにお話したとおりです」。「そこでラグエルはトビアに、「ゆっ
くりなさい、子よ、ゆっくりなさい。父トビトに使いを出して、あなたのことを知らせ
てやりましょう」と言うと、トビアは、「いいえ、ほんとうにお願いです。わたしをこ
10 こから立たせて、父のもとに帰らせてください」と答えた。「ラグエルは立ち上がり、
トビアに妻サラと、また全財産の半ばすなわち召使と下女、牛と羊、ろばとらくだ、
11 衣類と金銭と家財道具とを譲った。(3)「そしてかれらをつつがなく出立させた。かれはト
ビアを抱いて言った、「子よ、さようなら、元気で行きなさい。天の主が、あなたと妻
サラに安らかな旅を続けさせてくださいますように。そしてわたしが死ぬ前に、あなた
12 たちの子どもを見ることができますように」。「それから娘サラを抱き、接ぷんして*言っ

た、「娘よ、しゅうとと、しゅうとめを敬いなさい*。今から後、かれは生みの親と全く同じ
く、あなたの両親となるのだから。娘よ、安心して行きなさい。生きている間、わたし
にあなたについて、良いことを聞かせてください」。そしてかれらを抱き、旅立たせた。
13 エドナもトビアに言った、「愛する子よ、兄弟よ、主があなたを伴って行かれますよう
に。わたしは、あなたと娘サラの子どもを見ることができるまで、死なないで生きてい
たい。主の前で娘をあなたの保護にゆだねます。一生のうち一日たりとも彼女を悲しま
せないようにしてください。若者よ、無事に。今から後、わたしはあなたの母であり、
サラはあなたの妹です。主が、あなたと彼女を導き*、あなたがた*が一生の日々をともに
平安のうちに送ることができますように」。そしてふたりに接ぷんして元気で旅立たせ
14 た。「トビアは、このような幸福な旅を与えてくださった天と地の主、万物の王を賛美し、
喜びに満ち、元気でラグエルのもとを出発した。なおトビアはラグエルとその妻エドナ
を祝福し、「主がわたしに一生の日々、あなたがたを敬う恵みを与えてくださいますよ
うに」と言った*。

---

(3) ラグエルは約束どおり(8 21)、トビアに全財産の半ばを譲った。この財産は不動産ではなしに、召使と家畜と家財道具と金銭などの動産であった(創30 43 32 14以下参照)。

11

1 かれらがニネベに面するカセリン(1)に近づいた時、ラファエルはト
2 ビアに言った、―「あなたはわたしたちが、どのようにして父と別
3 **目の回復** れてきたかを知っています。―さあ、わたしたちは急いであなたの
妻よりさきに行き、彼女がわたしたちのあとから来る間に*、家のし
4 たくをしましょう」。―そこでふたりはいっしょにさきに行った。ラファエルは、「胆の
5 うを手に持ちなさい」と言った。犬もともについて行った(2)*。―その時、アンナはすわっ
6 て、むすこの帰る道を見守っていた。―彼女はトビアが来るのを見つけて、父トビトに
7 言った、「ごらんなさい、むすこが旅に出た人といっしょに帰って来ます」。―ラファエ
ルはトビアが父に近づく前にかれに言った、「わたしはかれの目がきっと開くことを確
8 信します。―魚の胆じゅうをかれの目に塗りなさい。薬が白い膜をちぢませて、目から
9 はぎ取り、あなたの父は視力を取りもどし、光が見えるようになるでしょう」。―その
時、アンナはむすこのほうへ走り寄り、その首に抱きつき、「子よ、あなたに会えたか
10 ら、わたしはもう死んでもいい」と言って泣いた。―トビトも立ち上がり、よろめきつ
11 つ中庭の戸の所に行った。―トビアは魚の胆じゅうを手にして父に近づき、目に息を吹
きかけ、かれをいだき、「お父さん、しっかりなさい」と言って薬を塗ると、かれは痛
12 みを感じた*。―そこでトビアは両手でかれの目のすみから白い膜*を取り除いた(3)。13 トビト

14 はむすこの首に抱きつき、泣きながら言った、「子よ、わたしには、おまえが見える。
わたしの目の光であるおまえが」。―そしてかれに言った、

「神は賛美されますように。
その偉大なみ名は賛美されますように*。
そのすべての聖なる天使も賛美されますように。
その偉大なみ名はとこしえに賛美されますように*。
神は、わたしをむち打ち、
またあわれみをたれてくださった(4)*。」

【注】(1) 帰りの道順については、ここだけにしるされている。シナイ本には「カセリン」となっているが、ブルガタ訳では「カラン」。カセリンの所在は不明。しかしカランはブルガタ訳によれば、エクバタナとニネベの中間にあり、トビアは十一日目にそこに達したとなっている。バチカン本には、「トビアは旅立ってニネベの近くに到着した」とあり、また詳しい地理的説明もあるが、その場所は明らかでない。

(2) 行きも帰りも犬がふたりにつき従っている。バチカン本とシナイ本には、「犬があとからついて来た」とあるが、ブルガタ訳にはアンナははるかにトビアを見いだし、夫トビトの所に走りもどった(6節)とあり、またその時、「ともに旅をしていた犬がさきに走り、使者のように近寄り、尾を振って喜んだ」(9節)となっている。

(3) 失明がいやされたことは、トビアが天使のさしずで魚の胆じゅうを目に塗ったからである。胆じゅうは昔から目薬として効果があるとされているが、ここでの出来事は自然的現象ではなく奇跡的である。

(4) 13$_{2}$に再び繰り返されるこの思想は、旧約聖書の随所に見られる(申32$_{39}$、サムエル上2$_{6}$など参照)。

それでわたしは今、むすこトビアを見ることができる」。

15 そこでトビト*は声高らかに神をたたえつつ喜びに満ちて家にはいった。トビアは父に、旅が恵みに満ちたものであったこと、お金を持ち帰ったこと、またラグエルの娘サラをもらったことを物語り、「彼女は今やってきます。ニネベの門の近くまで来ています」と告げた。

16 トビトは喜びにあふれ、神をたたえつつニネベの門まで嫁を迎えに出かけた。かれがだれにも手をひかれずに威勢よく歩いて行くのを見て、ニネベの人々は驚いた。トビト

17 はその人々の前で、神がかれをあわれんで目をあけてくださったことを感謝した。—それからトビトはむすこトビアの妻サラに近づき、彼女を祝福して言った、「娘よ、よくぞ来てくれました。娘よ、あなたをわたしたちの所へ導いてくださった神は賛美されますように。あなたの父は祝されますように。あなたの母は祝されますように。わたしの子トビアは祝されますように。そして娘よ、あなたも祝されますように。娘よ、遠慮なくあなたの家にはいりなさい。祝福と喜びのうちにはいりなさい」。

18 その日、ニネベに住むすべてのユダヤ人の間に喜びがみなぎった。19 またアヒカルと

20 そのおい*ナダブ*とが喜んでトビトの家を訪れた。—そして喜びのうちに、七日間、トビ

21 アの婚礼の祝いが続き、多くの贈り物がかれに与えられた。(5)*

12

1 さて婚礼の祝いが終わった時、トビトはその子トビアを呼んで言

ラファエル

2 った、「子よ、おまえといっしょに旅をした友に与える報酬と、さ

身分をあかす

らに報酬のほかに与えるものについて考えなさい」。—かれは父に言

った、「父よ、どれほど報酬を与えればよいでしょうか。かれがわ

たしとともに持ってきた財産の半ばを与えても、わたしにとって損ではありません。

3 かれはわたしを無事に連れ帰り、妻をいやし、わたしといっしょにお金を持ち帰り、あ

4 なたをもいやしました。報酬をどれぐらい追加すればよいでしょうか」。—トビトは言っ

た、「子よ、かれが持ち帰ったすべてのものの半ばを、かれが受け取るのは当然です」。

5 そこでトビアはかれを呼んで言った、「あなたが持ち帰ったすべてのものの半ばを報酬

として受け取り、元気で行きなさい(1)」。

6 ラファエルはふたりを、ひそかに呼んで言った、「神を賛美し、神に感謝しなさい。

その偉大さをあがめ*、あなたがたに示された恵みを、生きとし生けるものの前で感謝

しなさい。そのみ名をほめたたえて歌うのはよいことです*。すべての人々の前で神のみ

---

(5) トビアは郷里に帰り、再び慣習どおりの婚宴を開いた(8注5参照)。

【注】(1) トビトとその子トビアは、まだラファエルの本性を知らなかった。天使から多くの恵みを受けたので、じゅうぶんな報酬を与えたいと思い、約束(5 15-16)以上に、持ち帰った財産の半ばを提供しようとした。

7 わざを輝かしく言い表わし、神への感謝を怠ってはなりません。 ―王の秘密を表わさな
いことはよいことです。しかし神のみわざを輝かしく賛美し、表わすことはよいことです。(2)
善業をしなさい。そうすれば、悪があなたがたを見いだすことはないでしょう。
8 断食*をもって祈ることはよいことです。正義をもって施すことは、不義をもって富むこ
9 とよりもよいことです。施しをすることは、お金を貯えることよりもよいことです。(3) ―施
しは人を死から救い、すべての罪から清めます。施しをする人々は長寿を楽しむでしょ
10 う。 ―しかし罪と不義とを行なう者は自らの魂の敵です。
11 わたしはあなたがたに事の真相をことごとく明かし、もはや何事も隠しません。わた
しは『王の秘密を表わさないことはよい。しかし神のみわざを、栄光をもって表わすこ
12 ともよいことです』と、すでに言い明かしました。 ―さて、あなたとサラが祈っていた
時、わたしはあなたがたの祈りの記録(4)を神のみいつのみまえに携えて行き、それを読み
13 ました*。またわたしは、あなたが死者を葬った時にも同じくしました。 ―あなたが死者
を葬りに行くため、ためらわずに立ちあがり、食卓を離れた時、わたしはあなたを試み
14 るために(5)つかわされました。 ―またあなた*と嫁のサラとをなおすために、神はわたしを
15 つかわされました。―わたしは主のみいつのみまえに立ち、行き来する七人(6)の聖なる*天使
のひとりラファエルです」。

16 そのとき、ふたりとも心さわぎ、恐れて地にひれ伏した。 17 ラファエルはかれらに向
かって言った、「恐れるな。あなたがたに平安があるように。とこしえに神をたたえなさ

---

(2) 神の計画は地上の王のはかりごとと同じく、極秘のうちに行なわれる。もし王の秘密事項をもらす人があれば、その人は裏切り者として刑罰を受ける。これに反して、神の神秘な摂理と、そのわざをあらわし、公にすることは非常によいことであり、かつ報いあることである。またそれは神の摂理にあずかった人にとっては義務的なことでもある（格25 2参照）。

(3) これらの戒め（8 9節）は文学的にかつ概念的に、旧約聖書の教訓書と一致する（詩37〔36〕16、シラ29 11参照）。ユダヤ人は神と隣人と自分に対する宗教的義務を、祈りと断食と施しをもって果たしていた。イエズス・キリストは、この三つの事がらを取り上げて、その正しい仕方を教えている（マタイ6 2―8 16―18参照）。

(4) 天使にはいろいろな役目がある。ある場合は、神と人との間の仲介者となり（黙8 3―4参照）、ある場合には、取次者となる（ヨブ33 23、ゼカリヤ1 10―12参照）。本節ではトビトの祈りと善業の記録を神の前に示す取次者となっている（使10 4参照）。

(5) サタンがヨブを試みるために神からつかわされたように（ヨブ1 2章）、ここではラファエルが、サタンと異なる形で神からトビトにつかわされた。試練は神のご計画によるもので、特にトビトとかヨブのような義人を、さらに聖化するために与えられる。試練に対するこのような考え方については、格3 11 12、エレミヤ5 3、マカバイ下6 12―17、ヘブライ12 6参照。

(6) 聖ヨハネが見た幻でも七人の天使が神のみまえに立っている（黙1 4 8 2参照）。聖書では、「七」の数は、普通には完全性を意味する数として用いられている（ゼカリヤ3 9 4 10参照）。聖書にはラファエルのほかに、なお二位の天使の名があげられている。すなわちガブリエル（ダニエル8 16、ルカ1 19）とミカエル（ダニエル10 13、ユダ9、黙12 7）がそれである。聖書外典のエスドラス第二〔四〕書とエノク書では、七位の天使を架空的な名で呼んでいる。本節の天使「七人」は、ペルシア神話、すなわちアメシャ・スペンタスに基づく数とする説があるが、これは一般に認められていない。

18 い。―あなたがたとともにいた時、わたしがあなたがたといっしょにいたのは、わたしの好意からではなく、神のみ旨によるものです。日ごとに神を賛美し、かつ神に向かって歌いなさい。―あなたがたはわたしが食べるのを見た*が、あなたがたが見たのは幻に
19 すぎない。(7) ―地上において主をたたえ、神に感謝しなさい。今、わたしは、わたしをつ
20 かわされたおん者のもとへ上って行きます。あなたがたに起こったすべての出来事を書
21 きしるしなさい」。それからかれは天に上った。―かれらは再び立ち上がったが、もはや
22 かれを見ることができなかった。―かれらは、神の使いが現われるほどの偉大な神のみわざのために、神をほめたたえて歌い、神に感謝した。

13

1 トビトは喜びにあふれ、祈りを書きしるして*言った、

トビトの賛美(1)

「とこしえに生きたもう神は賛美されますように。
そのみ国は限りなく続く*。
神はむち打ち、かつあわれみを賜わる。
深い地の底のよみのくにに導きくだり、
またその深いふち*から引き上げてくださる。
そのみ手からのがれうるものはいない。(2)
3 イスラエルの子らよ、異邦人の前で神に感謝せよ。

4 神はあなたがたをかれらのうちに散らし、
そこでその偉大さを示された。
すべての生けるものの前で神をほめたたえよ。
かれはわれわれの主、われわれの神、われわれの父であり、(3)
代々にわたって神である。

5 かれは、たとえあなたがたを不義のゆえにむち打っても、
なお、あなたがたすべてをあわれみ、
あなたがたが散らされている国々から、

---

(7) 天使は自分の本性についての疑いを除くために、自分がかれらとともに飲食したことは幻にすぎなかったと教える。ブルガタ訳では、「わたしは人間に見えない霊的飲食物を用いる」となっている。

【注】(1) 本章は祈りであるばかりでなく、賛歌でもある。しかし聖書の古代歴史書の中に見られる賛歌に比べると、文学的には劣っている(士5章、出15章、申32章、サムエル下1$_{18-27}$参照)。本章の賛歌は二部に分かれている。すなわち(一)幽囚の地にあったイスラエルの民と、トビトのために行なわれた神のみわざの賛美(1—9節)と(二)廃虚の中から新しく建てられる聖都エルサレムの偉大さをたたえる預言の部分(10—18節)とである。

(2) これは旧約時代の一般的思想である(申32$_{39}$、サムエル上2$_{6}$、知16$_{13-15}$、詩30〔29〕$_{4}$ 86〔85〕$_{13}$参照)。

(3) イスラエルの民は、初めから「神は父である」という思想をいだいていた(出4$_{22}$、申32$_{6}$、イザヤ63$_{16}$ 64$_{8}$、エレミヤ31$_{9}$参照)。

6 あなたがたをふたたび集められるであろう。(4)*
もしも、あなたがたが心をつくし、霊をつくして神に立ち返り、
かれのみまえに正しく行なうならば、
かれはあなたがたのほうに向き、
そのみ顔をかくすことは、もはやなさらないであろう。
7 今かれがあなたがたのために何をなさったかを考えて見よ。
そして声高らかに神に感謝し、
正義の主を賛美し、
代々の王(5)をほめたたえよ。

8 *わたしは幽囚の地において神に感謝し、
罪深き民に、その力と偉大さとを示すであろう。
罪びとよ、神に立ち返り、そのみまえに正義を行なえ。
神はあなたがたを受け入れ、あなたがたにあわれみを垂れるであろう。
9 しかしだれがよくこれを知りえようか。
わたしは心をつくして天の王をほめたたえる。

10 わたしの魂は、一生の日々、喜ぶであろう。
選ばれたすべての民よ、主を賛美せよ。
あなたがたはみな、その偉大さをあがめ、
祝いをして主をたたえよ。*

11 聖なる都エルサレム(6)よ、
主はあなたの手のわざのゆえにあなたをむち打たれた。*
しかし正義の子らをふたたびあわれまれる。*
12 主にふさわしく感謝をささげ、代々の王*をほめたたえよ。
あなたの幕屋は、ふたたび喜びのうちに建てられるであろう。
神がよろずよにわたってとこしえに、

(4) このように選ばれたイスラエルの民に対して、神がその正義と慈悲とを示したことは、イスラエル民族の歴史によって明らかである(申28—30章、士2[6]—3[6]、列下17[17—23]、ユディト5[7—19]参照)。
(5) 11節にも同じ語句が出る(なおエレミヤ10[10]にもある)。神を王とする思想は、君主制度に基づくもので、詩編の中によく現われている。詩編には全地に広がり、かつ代々にわたる王としての神の権威についてしるされているが(詩47[46][3-6]—145[144][13]参照)、「代々の王」という語句は見られない。
(6) エルサレムはまことの神の住まいであり、都であり、神の約束はそこにあった(サムエル下7[13—16]、イザヤ1[24—27]49[14—18]参照)。トビトは将来、エルサレムが新しく生まれ、再建されることを確信して疑わない。

あなたのもとで、すべてのとらわれの人を喜ばせ、
あなたのうちで、すべてのさち薄き人々を愛されるように。
13 輝く光が地のすべてのはてまで照りわたり、
国々の民が遠くからあなたのもとにつどいきたり、
津々浦々に住む人々は、主なる神*のみ名に近づき、
手に手に、天の王へ供え物をささげるであろう。
よろずよの人々は、あなたのうちにおいて喜びをあらわし、
あなたの名*は代々とこしえに栄えるであろう。
14 すべてあなたをあしざまに言う者はのろわれるであろう。
すべてあなたを滅ぼし、
あなたの城壁を打ちこわし、
あなたのやぐらをたおし、
あなたの住まいを焼き払う者は、のろわれるであろう。
15 あなたを建てる*者は、永遠に幸いである。
16 14 15

楽しみ*喜べ、正義の子らのゆえに喜べ。
17 もろびとはつどいきたり、永遠の主を賛美する。
あなたを愛する者は幸いである。
あなたの平和を楽しむ者は幸いである。
16 あなたの懲らしめのために悲しむすべての者は幸いである。
かれらはあなたのうちにおいて楽しみ、
とこしえにあなたの喜びを見るであろう。
17 18 19
わたしの魂よ、主を、偉大なる王を賛美せよ。
エルサレムも、その宮も新たに*建てられ、代々に続くであろう。
20 もしもわたしの子孫のうち、だれかが生き残ってあなたの栄光を見、
天の王に感謝をささげるならば、わたしは幸いである。
エルサレムの門はサファイアとエメラルドで、
あなたの城壁は宝石で建てられるであろう。
エルサレムの塔は黄金で、
21 そのとりでは純金で建てられるであろう。

エルサレムの道は、ざくろ石と、オフル[7]*の石とで敷きつめられるであろう。
エルサレムの門は喜びの歌をうたい、
その家々は『アレルヤ[8]、イスラエルの神は賛美せられるように』と言う。
祝福された人々は、とこしえにいつまでも、
その聖なるみ名を、あなたのもとで*賛美するであろう」。

14

トビトの遺言

1 こうしてトビトの感謝のことばは終わった。2 かれは百十二のよわいを重ね、安らかに死を迎え、ニネベに手厚く葬られた[1]。3 かれが視力を失った*のは六十二歳の時であったが、ふたたび目が見え、4 その後しあわせに暮した。かれは施しをし、神を賛美し続け、神の偉大さをたたえた。5 死に臨んで、子トビアを呼び[2]、勧めを与えた。「子よ、あなたの子らを連れ、6 急いでメディアに行きなさい。わたしはナホムがニネベについて告げた神のことば[3]、すなわちあらゆる災いが、ニネベとアッシリア*に必ず起こり、襲うことを信じる。神からつかわされたイスラエルの預言者のことばは、すべて成し遂げられ、かれらのことばは一つとして無になることはないであろう。すべての事は定められた時に起こるであろう。メディアに住むほうがアッシリアやバビロニアに住むよりも安全であろう。わたしはすべて神の語られたことは、実現しかつ起こり、その預言のことばは一つとして滅びないこ

とを知り、かつ信じる。イスラエルの地に住むわたしたちの兄弟は、すべて散らされ、この良い土地からとりことして連れ去られ、イスラエル全土は荒れ果て、サマリアもエ7ルサレムも荒れ果て、神の宮は焼かれ、時至るまで荒れ地のままとなるであろう。しかし神はふたたびかれらをあわれみ、イスラエルの地に連れ帰るであろう。かれらは定めの時が満ちるのを待ちつつ、そこでふたたび神の宮を建てるであろう。しかしそれは初めの宮には及ばない[4]。そしてその後、かれらはみな幽囚から帰り、エルサレムを輝かしく再建するであろう。イスラエルの預言者たちが告げたように、神の宮も、そこに新たく再建するであろう。

---

(7) ソロモンはこの場所から貴金属や良質の木材を船で運んだ(列上10[11]、歴下9[10]、イザヤ13[12]参照)。オフルはおそらく西南アラビア、あるいはインドのある地方をさしているのであろう。しかしその所在は不明。

(8) 本節は賛歌の結びである。やがてエルサレムの都は、ふたたび一神教の中心となり、人々は異口同音に喜びのことば「アレルヤ」を唱えるようになる。

【注】(1) トビトはあらゆる試練ののち、神のみわざをたたえて歌い、ヨブのように(ヨブ42[10-17])、喜びに満ちて余生を全うした。

(2) 太祖のようにトビトはむすこを呼び、おだやかに遺言した。すなわちイスラエル民族の将来についての預言について語り(4-7節)、戒めを与える(8-11節前半)。

(3) 預言者たちが預言したように(ナホム2-3章、なおイザヤ10[12-19]参照)、ニネベはバビロニアに征服され、紀元前六一二年に滅びた。バビロニアは紀元前五三九年に(イザヤ13-14章、エレミヤ50-51章)、ペルシアのキロスに征服された。メディアはそれ以前(549 B.C.)に、ペルシアに合併された。

(4) イスラエル人の帰国と神殿の再建とを明記している(ハガイ2[3-4]、エズラ1[3]以下、3[6]以下参照)。しかし、その神殿の壮麗さは初めのソロモンの神殿に劣る。

6 に建てられるであろう。 ―そして全地のもろもろの民は改心し、心から神をおそれ、か
8 れらをあざむいて迷いの道に導いた偶像を捨て、正義のうちに永遠の神をほめたたえる
9 であろう。 ―その日、生き残って、心から神をおぼえるすべてのイスラエルの子らは、
エルサレムに行き、アブラハムの地に安らかに、いつまでも住み、そしてそれは、かれ
らに譲られるであろう。真心をもって神を愛する者は喜び、罪と不義を犯す者は、すべ
ての地から消えうせるであろう。

9—8 子らよ、今あなたがたに勧める。真心をもって神に仕え、神の意にかなうことをし
10 なさい。あなたがたの子らに正義と施しを行なわせ、そしてかれらが神をおぼえ、心と
11 力とをつくして、神のみ名を絶えずほめたたえるようにさせなさい。子よ、今あなたは
12 ニネベを去りなさい。ここに住んではいけない。あなたが、わたしのかたわらに母を葬
るその日、一日さえもこの地域内にとどまってはいけない。ここでは多くの不義や偽り
10 が行なわれているのが目につく。しかもかれらはそれを恥と思っていない。 ―子よ、ナ
ダブが自分を育てたアヒカルに何をしたかを見なさい。アヒカルは生きながらにして地
下に連れ行かれたではないか。しかし神はナダブの顔に恥を与えた。アヒカルは光にも
13 どり、ナダブはアヒカルの生命を絶とうと計ったため、永遠のやみに落ちた。アヒカル
は施しをしていたために、ナダブが仕掛けた死のわなをのがれ、ナダブはかえってその

11 死のわなに落ちて滅んだ。(5) ―子らよ、今、施しは何をもたらすか、また死をもたらす不
義が、どんなものであるかを、よく考えなさい。しかし今や、わたしの魂は消えて行
く」。

12 そこで子らが、かれを寝台に横たえると、かれは死に、ねんごろに葬られた。 ―母が
死んだ時、トビアは彼女を父のかたわらに葬った。そして妻と子ら*とを伴って、メディ
13 アに向かって出発し、エクバタナのしゅうとラグエルのもとで生活した。 ―トビアは年
老いたしゅうとと、しゅうとめをねんごろに世話し、メディアのエクバタナに葬った。
14 かれはラグエルならびに父トビトの遺産をつぎ、 ―光栄のうちに百十七歳の寿命を全う
15 した。 ―かれは死に先だって、ニネベの滅亡を見かつ聞き、その人々が、メディアの王
アキアカロスに捕えられて(6)メディアに連れ行かれるのを見た。そしてトビアは、神がニ

(5) トビトは善業を行なう人は良い報いを受け、悪業を行なう人は悪い報いを受けることを、アヒカル物語を通じて教える。アヒカルは自分が愛育したおいのナダブの陰謀によって殺されようとしたが、その善業の故に救われた。これに反し、ナダブは罪の報いとして、自分で仕掛けた死のわなに落ちて死んだ。

(6) ニネベの滅亡(612 B.C.)は、聖書では本節のみに短かくしるされているだけである。しかしこの事は歴史的には重要な事件である。ニネベはバビロニアのナボポラッサルと、メディアのキアクサレスの連合軍によって滅ぼされた。かれらの名は、本書のギリシア語訳がなされた時代には、一般に知られていなかったので、シナイ写本にはメディア王の「キアクサレス」の代わりに「アキアカロス」の名が、またバチカン写本には最も著名な王たち、「ネブカドネザル」と、「アハシュエロス」の名がしるされている。

ネベとアッシリアの子らに対してなしたすべての事について神を賛美した。かれは死ぬ前に、ニネベの運命を喜び、代々にまします主なる神をほめたたえた。アーメン。

ユディト書